

に細川幽齋が詠んだぞうな。

天と地を 団子に丸め  
手に乗せて  
ぐっと飲めども  
喉にさわらず

太閤さんが感心して言われたところ、それまで黙っていた曾呂利新左衛門が「ちよっと待ってください。わたくしもやりましよう」

「はあ、はあ、こりゃりっぱなもんだ」で、太閤さんが言われ、曾呂利新左衛門が褒美をもらったぞうな。

この話は笑話に属するが、関敬吾『日本昔話大成』では、直接関連のありそうな話型は見つからないようだ。ただ、ある程度関わりのあるものとしては、「笑話」の中の「巧智譚」に属し、さらに「業較べ」に分類されている。「小さい較べ」と「法螺較べ」に当てはまるようだ。後者を紹介する。

### あらすじ

昔、太閤さんが日本国中の殿さんを集め、どの大名にも「歌を詠め。おまえたち、歌といつものはどついうわけのできるのか」って聞かれたぞうな。一人が「それは山と言わんでも山と思わせ、川と言わいでも川と思わせるように作るのが歌でございます」と答えたぞうな。

## 太閤さんの歌比べ

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

## 大名に歌詠ませる

「よし、それはいいがここに集まってくる大名一人ずつ大きな歌を詠め」それから次から次々に大きな歌だ。褒美を取名が詠んだ。一番しまいらせる」

「おつ、りっぱなこりや大きな歌だ。褒美を取と詠んだのだぞうな。」

天と地を 団子に丸め  
飲む人を 鼻毛の先で  
吹き飛ばしけり

「うーん、これもいい歌だ。褒美を取らそうか」。また、「待った、待った」て言うので、また一人が、

蚊のこぼす 涙の海の  
浮島の 真砂拾いて  
千々に砕かん

「うーん、これもいい歌だ。褒美を取らそうか」。また、「待った、待った」て言うので、また一人が、

4人のほら吹き。(a) 天に達する大木。(b) 富士をまたぐ大牛。(c) 天にとどく大男。(d) 胸辺り三百里の太鼓。

「うーん、これもいい歌だ。褒美を取らそうか」。また、「待った、待った」て言うので、また一人が、

太鼓はその大木でつく  
り、その牛の皮を用い、  
その大男にたたかせる  
ら。このような話なのであ  
る。(元鳥取短期大学教授  
(水曜日に掲載)